人権さんだ

4月号
令和６年（2024）
No. 541

教科書無償化運動の話

《問い合わせ》
健康福祉部　人権共生推進課
TEL：559-5148　FAX：563-7776
E-mail：jinken_u@city.sanda.lg.jp

▲新しい教科書を前に…

真新しい教科書を手にする時

４月は入学や新学期スタートの季節です。新学期を迎える人、新しい学校への入学を心待ちにしている人もいると思います。きっと新しい友だちや先生との出会いを楽しみにしていると思いますが、同時に子どもたちは真新しい教科書にも出会います。

今号は、教科書無償配布の歴史についての話です。

UD FONT
見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

昔、教科書は有償だった

今から63年ほど前、教科書は有償で教科書代として小学校では700円、中学校では1200円ほどが必要でした。その当時、一日働いても300円ほどの収入しかなかったのですから、子どもの数が今に比べて多かったこともあり、教科書をそろえることは各家庭にとって大きな負担でした。

3月になると保護者たちは、古い教科書をゆずってもらい、必要最小限のものだけを買いそろえるなど苦労していました。物価も値上がりをはじめ、各地で教育費の保護者負担を軽くしようという動きが出はじめました。

立ち上がった保護者たち

このころ、高知県のある小学校の校区では、学校の先生たちや市民会館の館長さんといっしょに保護者たちが文字を学ぶために開設された識字学級での読書会がはじまりました。

2年ほどたつうちに、「わたしたちが習った歴史と今の子どもたちが習っている歴史は全然ちがう。わたしたちも子どもの教科書を使って勉強しなおそう」という声が出はじめ、教科書を読む学習がはじまりました。その中で日本国憲法の勉強をしている時に、第26条のことが話題になりました。

日本国憲法第26条
（教育を受ける権利、教育の義務）

すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

②すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

保護者たちは「これだ、これだ」と何度も読み返しました。

「義務教育はこれを無償とするというのだから、教科書を買うのはおかしいのじゃないか」「教科書がただでないということは、憲法で定められたことが守られていないということではないか」ということが、話し合われました。

高知から全国へ

昭和36（1961）年3月に行われた会合の中で、「いくら請願しても効果はない。ただで配るまで（教科書を）買わずに頑張ろう」という提案がなされ、「教科書をタダにする会」がつくられました。

この会は、各地で集会を開き、署名運動をはじめ、いっしょにたたかう団体も増えていきました。教科書の無償要求は、憲法を守るための運動であるということに気づいた人々は、この運動を支持していきました。運動は、新聞やテレビにもとりあげられ全国に広がりました。そして、このような保護者たちの思いを伝える場がもたれましたが、なかなか要求はかないませんでした。

教育委員会は、「教科書をタダにする会」との交渉において、教科書無償化の要求は正しいと認めましたが、全員に教科書を配るという約束はしませんでした。買える人は買ってほしいという教育委員会の方針に対して、2000名の児童生徒のうち約8割にあたる1600名が、教科書を買わずに新学期がスタートしました。学校では先生たちが教科書の代わりにプリントを使って授業を続けました。

政府もこの要求の正しさを認め、昭和37（1962）年に法律をつくって、翌年から段階的に教科書が無償で子どもたちに配られることになりました。

当時の保護者たちの思いを知る

保護者たちの「せめて子どもたちには、生きていくための学力をしっかりつけさせてやりたい」という願いが教科書の無償化を実現させたのです。その思いをしっかりと受け止め教科書を大切に扱い学習に励みたいものです。

私たちが、今なにげなく手にしている一冊一冊の教科書には、このような歴史があったのです。

人権コラム

人権啓発誌「人権さんだ」の前身、「同和教育さんだ」23号と24号では、教科書無償化運動について2号にわたって掲載しています。

昭和56（1981）年は教科書無償化運動が始まってちょうど20年になる年で、「同和教育さんだ」は、この運動の意義や経過を詳しく記載していました。

当時の記事には、この運動が高知県のある被差別部落の母親たちが声を上げたことから始まったこと、その声は当時の学校や教育委員会、地域の人びとや政治・行政にまで届き、実現したことが書いてあります。

厳しい差別の中でも、母親たちは、この運動をつらぬくことが憲法を守り、子どもたちの未来を明るくするものだと確信してがんばり通したのです。

義務教育諸学校の教科用図書の無償に関する法律

（昭和37年　法律第60号）

第1条　義務教育諸学校の教科用図書は、無償とする。

（以下省略）

「無償化が実現するまで教科書は買わないで頑張ろう」という運動に対して「こんな運動をするのは部落の者ばかりじゃ」「部落の者と一緒になって事を荒だてる」・・（中略）・・・と、部落差別はきわめて露骨に、そして巧みに利用されたのでした。（同和教育さんだ23号より）

同和教育さんだ 24号（4月15日号）

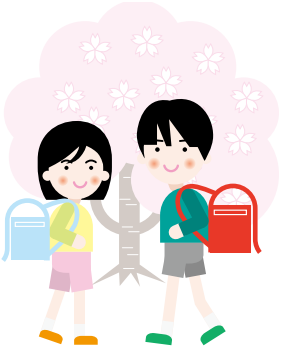
同和教育さんだ 23号（昭和56（1981）年3月15日号）

編集後記

昨今、インターネット上の書き込みで「部落差別はもうなくなったんじゃないか」というような言葉を見かけるようになりました。果たしてそうでしょうか。

むしろ今の状況は「見えにくくなった」といえるのではないでしょうか。見えにくくなっているので見ようとしなければ見えないのでしょう。差別の歴史をきちんと知ることから見えてくることもあります。教科書無償化運動もその一つです。

教科書はただ単に無償なのではないこと、だからこそ教科書を大切に扱い、人権感覚についてしっかり学んでほしいと願います。



令和５年度 人権ポスター・標語受賞作品

高平小学校4年（前年度）
前川　結香さん

●見のがすな
身近なあの子の
SOS

ゆりのき台中学校3年（前年度）
柳本　草樹さん

くらしの人権相談

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　9時～17時（※祝日・年末年始を除く）

専門相談員による性的マイノリティ特設電話相談（予約）

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　9時～17時（※祝日・年末年始を除く）
※専門相談員との相談日は予約後に調整

人権擁護委員による定例人権相談（予約）

TEL 559-5148　FAX 563-7776
《次回相談日》4月25日（木）13時～16時

わたし No.188 出会う 気づく つながる

ありのままのあなたが大好き

三輪幼稚園教職員　藤崎　美穂さん

自分なりの方法で気持ちを伝える大切さ

ここ数年間、人との距離を保つことが余儀なくされてきました。子どもたちには、「心がつながっているよ」と繰り返し伝え、『今できること』を探りながら過ごしてきました。ようやく少しずつコロナ禍前の元の生活に戻りつつありますが、今の幼稚園の子どもたちは『元の生活』というものを知らずに育っています。子どもたちにとって、『マスクの顔』が当たり前。表情から相手の気持ちを感じ取ることが難しいために『自分の気持ちを自分なりの方法で伝える』ということを大事にし、私自身も身振り手振りで大きく表現するなど工夫したり、「大好きよ」「〇〇ちゃんが大事」と意識的に言葉にして伝えたりしてきました。子どもたちが安心して園生活を送ることができるように何が必要であるか、自問自答を繰り返してきました。

温かいまなざしの中で

三田で生まれ育った私は、これまでずっと地域の人たちに見守られてきたように思います。私が幼い頃には、子ども会でいろいろな催しが盛んに行われていました。ある時、体調を崩して参加できなかった私に、「大丈夫か？」といろんな人が心配してくれたことを覚えています。一歩外に出ると「いってらっしゃい」「気をつけて」「おかえり」と声をかけてもらうことは当たり前。振り返ると、たくさんの地域の人たちの『温かいまなざし』の中で過ごしてきたのだと感じます。

数年前、ご縁があって自分の出身園で勤務することになりました。地域の方々は、昔と変わらず子どもたちのことを見守り、さらには大人になって教職員として戻ってきた私のことも温かく受け入れてくれました。出身園で子どもたちと過ごす日々の中で、自身の幼い頃を振り返る機会が増えました。これまでどんな時もありのままの私を受けとめてくれる人がいて、たくさんの温かい『愛情』を感じながら育ってこられたことが改めて分かり、それこそが私の大きな原動力、さらには『生きていく力』になっていたことを改めて感じました。

ここに居ていいと思える居場所作りが大事

「大きくなったら…」と、子どもたちが可愛らしい夢を教えてくれることがあります。しかし、世の中には様々な困難を抱え、生きづらさを感じている子どもたちもいます。みんなが大人になることを楽しみに、夢に向かって生きていけるわけではないのかもしれません。でも、誰か一人でも自分のことを信じて温かな愛情を注いでもらった記憶があれば、つまずいたり転んだり立ち止まったりしながらでも、自分らしく生きていけるのではないかと思うのです。だからこそ今、私が大事にしたいのは、子どもたちが「自分はここに居ていい」「自分らしくいていい」と思える、安心できる居場所作りです。子どもたち一人一人が自分の力を信じて、自分のことも相手のことも大事にしながら、夢に向かって羽ばたいてくれることを願っています。そのためにも「ありのままのあなたが大好き」と伝え続け、これからもずっと子どもたちの応援団でありたいと思います。

令和５年度
ラブピース４コマまんが受賞作品

「鏡」

一般
前中 初美 さん